

「修学旅行の訪問先が大学進学に与える影響の分析と大学の魅力発信の方策 ～修学旅行生および大学在校生に対するアンケート分析等を事例として～」

(指定課題：京都地域の大学進学に修学旅行等が与える影響分析と学校行事を活用した魅力発信の方策)

研究代表者 井上 学 (平安女学院大学国際観光学部・准教授)

共同研究者 毛利憲一 (平安女学院大学国際観光学部・准教授)

同 荒川雄次 (平安女学院大学国際観光学部・教授)

同 山岡祥子 (平安女学院大学国際観光学部・准教授)

研究協力者 岡本 健 (京都文教大学総合社会学部・講師)

研究協力部署 総合企画局市民協働政策推進室大学政策担当
産業観光局観光MICE推進室

1. 研究概要

1. 1. 問題の所在

地域の持続可能な成長においては一定程度の人口の維持が必要とされる。過疎問題に見られるように、人口の減少は地域経済の成長を妨げる要因のひとつとなっていることは自明である。しかし、人口が増加すればよいだけではなく、少子高齢化の現象で指摘されるように、生産年齢人口の増加が地域の発展において期待されるのである。特に、年齢的に若い人達は衰退した町を活性化するという点において大きな役割を果たしてきた。

具体的には、新しいワークスタイルやライフスタイルを持つ若い人達が、衰退した地域に魅力を感じ、居住することによって当該地域が活性化する、いわゆる「ジェントリフィケーション」はインナーシティの再生手法として注目を集めてきた(小長谷:2005)。また、20歳前後の学生達は地域の消費者として期待されると同時に、高齢者のみでは対応しきれない地域の諸課題のサポート役として期待されている。このように、若年層の居住は地域の再生や持続可能な発展に大きな役割を果たすのである。

地域の再生や発展の手法はいくつもの事例があるが、その中のひとつに、観光振興があげられよう。観光による地域の振興は高度経済成長期以降、多くの自治体で取り組まれてきた。これまでは、新規の施設を建設することで地域にインパクトを与えてきたが、現在のトレンドは既存の施設や資源を活用する手法である。この手法が対象とする事物は、自然や寺社仏閣、建築物、文化など多岐にわたり、地域資源として再発見、再評価されてきた。そのような場合、一般的には歴史があり、多くのものが集積している地域ほど地域資源は発見しやすい。すなわち、第二次大戦の影響が比較的軽微な歴史的な都市域であり、京都市はそれに該当しよう。

若年人口の確保と観光政策から検討した京都市の特徴としては、「大学のまち」と「国際

的な観光都市」という言葉に置き換えられる。この2点は京都市が持つ都市としての強みといえる。これらを堅固にすることで、今後の京都市の持続可能な発展に寄与すると考えられる。

1. 2. 京都市が持つ都市としての強みと研究の目的

①大学の集積と人口構成

京都市における男女・年代別の人口構成は図1のとおりである。日本全体の人口構成と同様に、60歳代のいわゆる「団塊の世代」、その子どもにあたる30歳代後半から40歳代前半のいわゆる「団塊ジュニア」の人口が多い。京都市内における10歳代後半から20歳代の人口が日本全体に比べて男女とも多い点が大きく異なる。これは大学が多く立地し、下宿している学生の多くが京都市内に居住していることが影響している。桐村・近藤（2005）は、それら下宿生の多くは周辺に大規模な大学が複数立地している上京区内に居住していることを指摘している。そこで、上京区における男女・年代別の人口構成を見ると男女ともに20歳代が非常に多いことがわかる（図2）。

このように京都市の「大学のまち」という強みは、大学が集積することで大学の周辺に若年層が居住し、それら世帯が地域を支え発展を促す可能性があることを示唆している。

②京都市における観光客の動向

京都市を訪れる観光客は1980年代から90年代にかけて4,000万人台で推移していたが、90年代末から増加に転じた。2000年には年間の観光客数を5,000万人とする構想が発表され、2008年には5,021万人と目標は達成された。近年における京都市内の入浴観光客の特徴を見ると女性の比率は58.7%と男性よりも高い（京都市産業観光局：2011）。難波（2007）によれば、1970年の京都の観光客の男女比率は55対45であったが、1975年には43対57に逆転したという。その後、男女比は入れ替わることが多かったが、現在は女性の比率が高まっている。

年代別に見ると、近年では50歳代と60歳代以上が全体の半分近くを占めている。男女比に変化が見られ始めた1970年代の年代別京都観光客数を見ると、最も多いのは20歳代

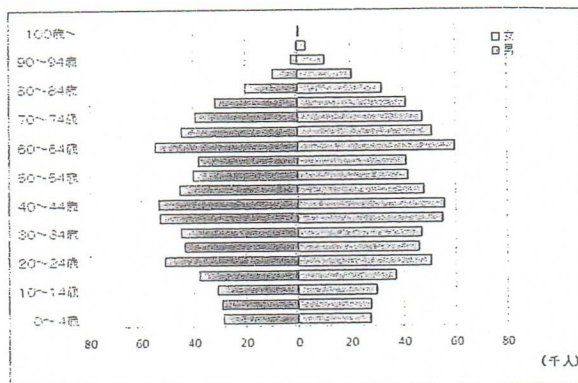


図1 京都市における男女別・年代別人口構成(2012年10月現在)

京都市推計人口より作成

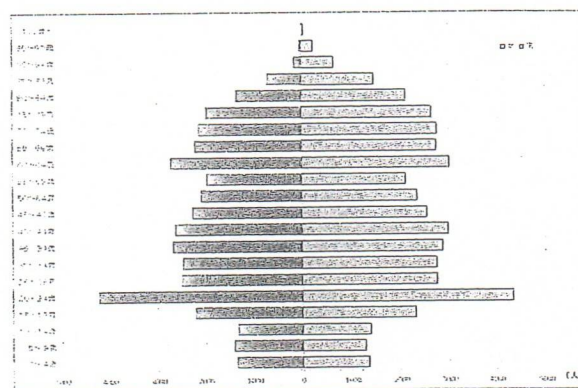


図2 京都市上京区における男女別・年代別人口構成(2012年10月現在)

京都市推計人口より作成

である。この1970年代は、日本国有鉄道によるDISCOVER JAPANキャンペーンによる国内旅行の喚起と、女性誌「an・an」「non-no」の日本の旅特集によって動機づけられた若い女性の旅行者、いわゆる「アンノン族」による国内旅行ブームと重なる時期である。そして、アンノン族が訪問した先は伝統的な日本の景観が残る地域であり、その代表は京都市であった（宗田：2011）。

すなわち、現在の京都市を訪れる観光客の主流は、当時アンノン族として京都を訪れた、ないしは京都にあこがれていた女性が、子育てや仕事が一段落し、時間的余裕が生まれた50～60歳代となり、20歳代の頃に訪れた・あこがれていた京都を再度、訪問していると推察される。つまり、若い年代の時にある地域に憧れを抱く、訪問するという体験は訪問先にとってのリピーターとなりうるといえよう。

一方、京都市を訪問した20歳未満の観光客は全体の3.8%、20歳代は20.2%、30歳代は14.4%である。この値から今後の京都の観光客数を想定すると、30歳代以下の観光客数が停滞している現状から、現在の50歳代以上の人達が体力的に移動できなくなった時に京都市の日本人観光客は減少すると想定される。少子化が進んでいる現状をふまえると、若い世代、特に修学旅行生を中心に京都市内の観光を誘致する必要があるだろう。

③研究の目的

以上の通り、本研究の関心は京都市の強みである、大学の集中と観光政策にある。それらを結びつけるものとして修学旅行生に注目したい。

京都市内における修学旅行生数は1984年には140万人であったが、1989年には120万人弱と減少した。1990年代に減少し続けたが、以降は横ばいであり、2011年は100万人程度である。修学旅行生の内訳を見ると、小学生はほぼ横ばい、中学生は若干の増加傾向であるのに対して、高校生は減少傾向にある。とりわけ、1990年代の修学旅行生の減少は主に高校生であった（図3）。これは、高校生の修学旅行先が北海道や沖縄、海外など選択肢が増えるとともに広域化しているためである。井上・荒川（2010）によれば、京都市内を訪問する修学旅行生数は中学生が高校生を上回り、訪問時期のピークや主要な発地は大きく異なるという。すなわち、中学生のピークは5～6月で主要な発地は関東地方で、高校生のピークは10～12月で主要な発地は北海道や東北地方である。

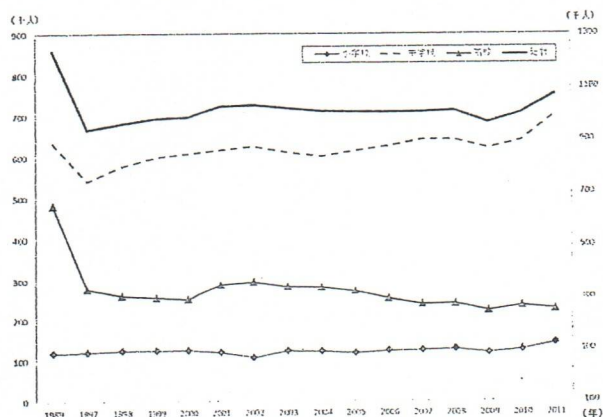


図3 京都市内を訪問した修学旅行生数の変化

このように、修学旅行は京都から離れた地域の居住者が居住地以外の都市の認知度を深めるとともに、訪問先にとっては地域の魅力を発信する機会といえる。特に、京都市内には世界遺産を始め多くの文化財があり、修学旅行生にとって京都に対する関心が深まる絶好の機会といえる。同時に、京都市では複数の大学を訪問できるという特徴がある。修学旅行

生が大学の学びや大学そのものに関心を持つことで、その後の進路に影響を与える可能性がある。これらをふまえると、京都市内の大学・短期大学、大学院（以下、大学）に通学する学部生・院生（以下、学生）のなかには、受験の動機のひとつとして、京都に対する関心や修学旅行で京都を訪れた体験が関係していると仮定できよう。

そこで、本研究では修学旅行で京都市内を訪問した体験が、その後の大学進学にどのように影響を与えているかを明らかにすることを目的とする。それをふまえて、大学が修学旅行生と関わることができるプログラムの可能性について検討したい。

調査対象は京都市内の大学に通学する学生と修学旅行で京都市内に訪れた中学生・高校生である。それぞれに対して、京都に対する関心や、受験動機などについてアンケート調査を中心に検討した。

2. 研究のオリジナリティ

本研究のオリジナリティは大きく以下の2点にある。ひとつは、京都における「大学」と「観光」の関係性について明らかにする点である。これは、修学旅行における京都での体験や京都に対する関心と、大学選択の動機づけとの関係性に注目して検討する。

つぎに、中小規模の大学が修学旅行生を受け入れる方策を検討する点にある。これは、大規模な大学が学生数を確保するだけでなく、中小規模の大学も同様に確保できることを目指している。それは、京都市における大学の集積による京都の強みの推進は大規模校のみの立地によって可能なのではなく、中小規模の大学も複数立地することによって選択肢が増加し、効果が発揮されるものだからである。

特に、これまで修学旅行のプログラムのなかでは注目されにくかった、大学の訪問ないしは修学旅行中に教員や在学生などが積極的に関わるプログラムを検討することで、修学旅行と大学の関わりを京都市の観光政策の一環と位置づけたい。京都市の観光政策と教育政策を「京都の強み」として位置づけるとともに、それらが「京都の強み」の推進源となることで、「学びのまち・観光のまち京都」の実現や少子高齢化に対するまちづくりの対応を可能とするからである。

3. 研究内容

3. 1. 大学生に対するアンケート調査

大学在学生に対して、web によるアンケート調査を実施した。実施期間は2012年10月20日～12月31日で、857名から回答が得られた¹⁾。

表1の通り、大学コンソーシアム京都の加盟大学から幅広く集まった²⁾。

表1 学校別アンケート参加者数(人)

立命館大学	136
平安女学院大学・短期大学部	88
同志社大学	87
龍谷大学・短期大学部	84
京都教育大学	75
京都大学	68
京都工芸繊維大学	63
花園大学	53
佛教大学	44
京都外国語大学・短期大学	41
京都産業大学	31
京都女子大学・短期大学部	18
京都光華女子大学・短期大学部	13
京都橘大学	12
明治国際医療大学	8
京都ノートルダム女子大学	5
京都薬科大学	5
その他の大学	26
総計	857

※回答者数1人以下の大学・短期大学はその他に集計した

表2 専攻別人数(人)

文学国際系	279
理工学工学機械農学系	127
社会政策公共系	124
教育学系	78
福祉生活系	58
法学系	48
言語・外国語学系	47
経済経営学系	49
医学薬学健康系	37
その他	10
総計	857

男女比は377人(44%)、480人(56%)である。学部・学科などの専攻別の回答者数は表2の通りである³⁾。

アンケート回答者の出身地(アンケート回答時の実家、帰省先)は図4の通りである。京都府、大阪府、滋賀県など近畿圏の回答者が多いが、それ以外の地域の回答者も幅広く存在する。修学旅行で京都市内を訪問した時点の居住地を図化したのが図5である。中学校の発地は関東・山梨、北陸・新潟、東海・長野地域が卓越し、中国・四国地方の西部や九州からの訪問もある。高校の場合は東北地方や九州地方など、より京都市から離れた地域からの訪問者数が多い。これは、京都市の観光統計年報の割合とおおむね一致する。

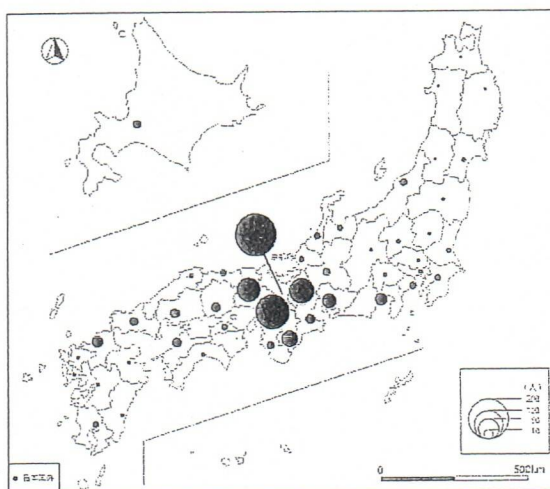


図4 アンケート回答者の出身地

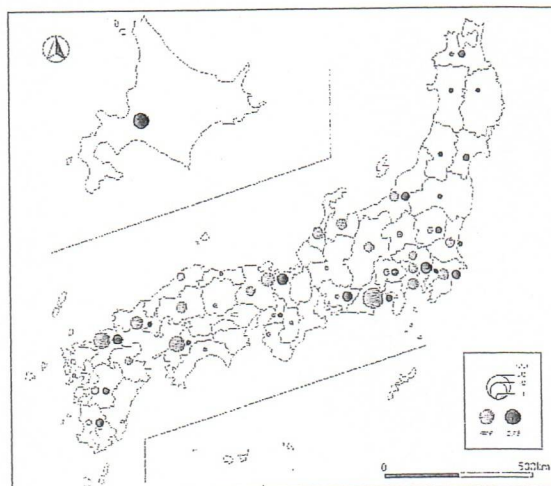


図5 修学旅行で京都に来たことがある人の発地

修学旅行で京都に来たことと、大学受験との関係に関する回答は表3のとおりである(n=321)。ここでは、「修学旅行で一度でも京都市内を訪問した人に対して、京都市内の大学を受験する際、修学旅行で京都市内を訪問したことが受験の動機にどれくらい関係しているか」質問し、修学旅行で京都市内を訪問した人を小中高高等学校別に集計したものである。

小学生の時よりも、中学生・高校生のほうが、修学旅行による京都市内の大学を受験する影響が大きく、それぞれ50%を超えた。いいかえれば、修学旅行で京都市内を訪問した人の3人に1人が、中学生・高校生に限れば2人に1人が修学旅行で京都に来たことで京都市内の大学に関心を持ち、受験したいという意識が高まったといえる。

さらに、京都を訪問したことによる印象の変化と大学受験の関係性を検討した。修学旅行で京都市内を訪問した人で、訪問後の印象について無回答であった人を除いた314人が対象である。「訪問後印象はよくなった」「訪問したが印象が変わらなかった」が大半を占める(表4)。「訪問後の印象がとてもよくなった」人と修学旅行で京都市内を訪問したこ

表3 修学旅行で京都を訪問した時期と大学受験に対する影響

	小学生(人)	中学生(人)	高校生(人)
1 大きく関係している	5	15	15
2 やや関係している	24	50	12
3 あまり関係していない	37	29	5
4 全く関係していない	75	34	20
計	141	128	52

表4 修学旅行の印象と大学受験の関係(人)

	1 訪問後印象はよくなった	2 訪問したが印象が変わらなかった	3 訪問したが印象が悪くなった	4 訪問後印象はよくなった	5 訪問後印象は悪くなった	合計
1 大きく関係している	19	11	2			32
2 やや関係している	21	34	21			76
3 あまり関係していない	7	38	29			74
4 全く関係していない	11	37	77	1	3	129
合計	58	120	129	4	3	314

とが大学受験と「大きく関係している」人、「訪問後の印象はよくなった」人と「やや関係している」人、「訪問したが印象は変わらなかった」人と「全く関係していない」人の間に大きな関係性が見られた。すなわち、京都市内を訪問した時の印象度合いが大きい人ほど、京都市内の大学を受験する傾向が高いといえよう。

そこで、修学旅行で京都市内を訪問した人としていない人の受験理由を検討した。表3の結果をふまえ、対象としたのは中学生と高校生の時に修学旅行で京都を訪問した人である(以下、同様)。大学の規模別⁴⁾に検討したのが表5と表6で、これをコレスポンデンス分析によって図化したのが図6と図7である⁵⁾。項目は三つまで選択可能とした。

修学旅行で京都市内を訪問した人は「3 京都に魅力を感じたから」「6 京都にある大学に進学したかったから」という京都に魅力をもって受験した理由が共通する動機であり、大規模校では、「7 京都に関係なくその学校に魅力を感じたから」「12 小説やマンガ、アニメや映画、ドラマなどの作品の影響で」と関係し、中規模校では「8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから」「9 ここしか受からなかったから」、小規模校では「1 修学旅行で訪問したから」「5 高校の先生が薦めたから」と関係した。修学旅行で京都市内を訪問していない人の場合、大規模校では、「7 京都に関係なくその学校に魅力を感じたから」、中規模校では「5 高校の先生が薦めたから」「6 京都にある大学に進学したかったから」「9 ここしか受からなかったから」「11 知人が通っていたから」、小規模校では「4 親が薦めたから」「8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから」「10 指定校推薦の枠があったから」と関係した。

表5 大学規模別大学進学のための理由(修学旅行で京都に来た人) n=438

	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1:大規模校	11	73	21	10	48	36	38	11	12	9	8	8
2:中規模校	4	20	3	2	14	4	19	5	0	0	1	7
3:小規模校	8	21	4	5	14	4	7	4	1	1	1	4
合計	23	114	28	17	76	44	64	20	13	10	10	19

表6 大学規模別大学進学のための理由(修学旅行で京都に来ていない人) n=1047

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1:大規模校	1	6	82	23	31	91	86	98	26	31	8	10	43
2:中規模校	1	1	31	6	23	55	25	47	19	13	4	3	15
3:小規模校	2	1	31	16	19	52	35	62	11	22	4	0	13
合計	4	8	144	45	73	198	146	207	56	66	16	13	71

※表5、表6の最上段の項目の番号は以下のとおりである。1 修学旅行で訪問したから、2 遠足で訪問したから、3 京都に魅力を感じたから、4 親が薦めたから、5 高校の先生が薦めたから、6 京都にある大学に進学したかったから、7 京都に関係なくその学校に魅力を感じたから、8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから、9 ここしか受からなかったから、10 指定校推薦の枠があったから、11 知人が通っていたから、12 小説やマンガ、アニメや映画、ドラマなどの作品の影響で、13 その他

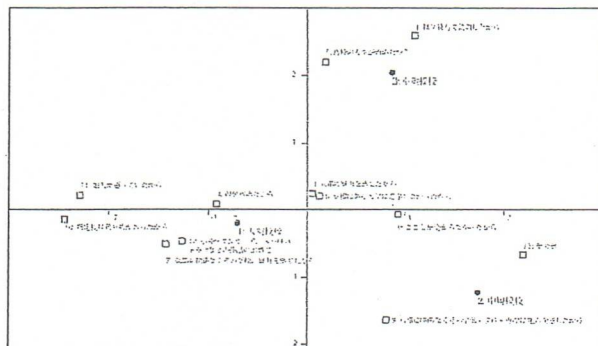


図6 大学規模別大学進学のための理由(修学旅行で京都に来た人) n=438

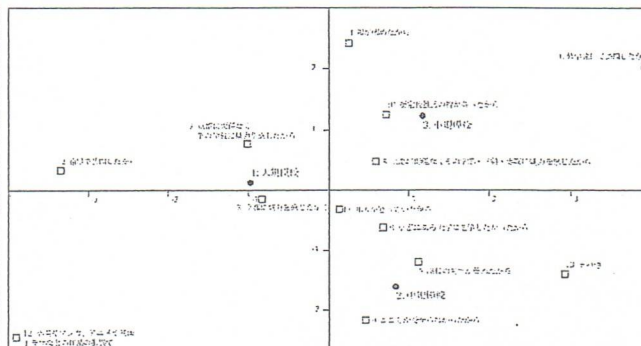


図7 大学規模別大学進学のための理由(修学旅行で京都に来ていない人) n=1047

さらに、修学旅行で京都市内を訪問した人の出身地域と現在在籍している大学の入学経緯との関係性を検討した(表7、図8)。

関東・山梨県は「1 修学旅行で訪問したから」と、北陸・新潟、東海・長野、九州・沖縄は「3 京都に魅力を感じたから」「6 京都にある大学に進学したかったから」「10 指定校推薦の枠があったから」「11 知人が通っていたから」「12 小説やマンガ、アニメや映画、ドラマなどの作品の影響で」と京都自体の魅力や修学旅行での体験が影響している。特に、関東・山梨は「1 修学旅行で訪問したから」と、九州・沖縄は「3 京都に魅力を感じたから」と大きく関係していることがわかる。

つぎに、この結果を男女別に検討した(表8、図9：男性、表9、図10：女性)。男性は「7 京都に関係なくその学校に魅力を感じたから」が、女性は「3 京都に魅力を感じたから」が図の中心に近く、全地域に共通する理由といえる。このように、修学旅行にきた経験があっても男女で志望動機の大きな違いが見られた。

地域別に分類すると、男性は中国・四国が「4 親が薦めたから」「3 京都に魅力を感じたから」、北陸・新潟、東海・長野は「6 京都にある大学に進学したかったから」「9 ここしか受からなかったから」、北海道・東北、関東・山梨、近畿は「5 高校の先生が薦めたから」「8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから」、九州・沖縄は「1 修学旅行で訪問したから」「10 指定校推薦の枠があったから」「11 知人が通っていたから」と関係した。女性では、北陸・新潟、東海・長野は「6 京都にある大学に進学したかったから」「10 指定校推

表7 地域別大学進学的主要原因(修学旅行で京都に来た人) n=430

(人)	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
1:北海道・東北	4	11	1	3	3	2	9	3	2	1	1	2	12
2:関東・山梨	5	19	5	0	17	1	15	1	2	2	1	7	81
3:北陸・新潟	2	14	4	0	12	5	1	0	3	1	1	1	17
4:東海・長野	4	17	4	3	17	1	7	1	2	1	2	3	68
5:近畿	0	11	6	5	5	9	13	3	0	0	1	2	56
6:中国・四国	3	20	4	4	11	11	6	1	1	2	1	2	69
7:九州・沖縄	5	20	4	2	8	8	9	2	3	3	1	2	67
合計	23	112	29	17	71	43	63	20	13	10	8	10	430

表7の最上段の項目の番号は表5、表6の注にある番号と同様である。以下、表12までの項目の番号も同様である。

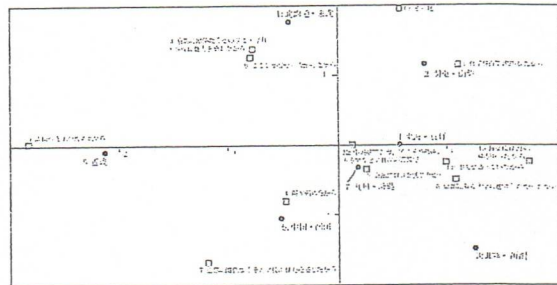


図8 地域別大学進学的主要原因(修学旅行で京都に来た人) (n=430)

表8 地域別大学進学的主要原因(修学旅行で京都に来た人・男性) n=193

(人)	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
1:北海道・東北	1	3	0	1	0	2	5	0	1	0	1	2	16
2:関東・山梨	0	4	1	0	3	3	9	0	1	2	0	3	26
3:北陸・新潟	1	6	1	0	5	3	2	0	0	0	0	0	18
4:東海・長野	0	9	1	1	8	2	2	3	0	0	0	0	25
5:近畿	0	7	1	3	6	7	11	1	0	0	1	2	39
6:中国・四国	1	8	3	2	2	7	3	3	1	2	0	1	33
7:九州・沖縄	2	10	3	1	4	5	3	0	2	3	1	1	35
合計	5	47	10	8	28	28	35	7	5	7	3	9	193

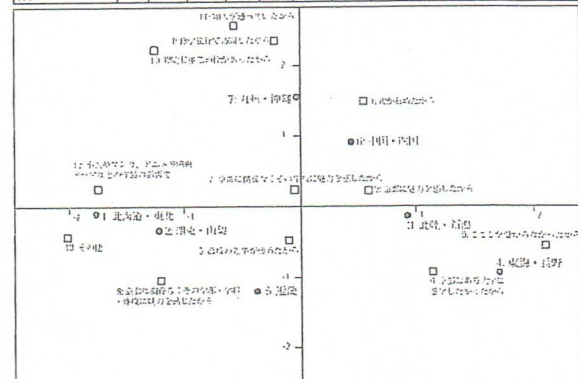


図9 地域別大学進学的主要原因(修学旅行で京都に来た人・男性) (n=193)

表9 地域別大学進学的主要原因(修学旅行で京都に来た人・女性) n=237

(人)	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
1:北海道・東北	3	8	1	2	3	0	1	3	1	1	0	0	26
2:関東・山梨	5	15	4	0	14	1	6	4	1	0	1	4	55
3:北陸・新潟	1	8	3	0	7	2	2	0	3	1	1	1	29
4:東海・長野	4	8	3	2	9	2	5	1	2	1	2	3	42
5:近畿	0	4	5	2	0	2	2	0	0	0	0	0	17
6:中国・四国	2	12	1	2	9	4	3	1	0	0	1	1	36
7:九州・沖縄	3	10	1	1	4	3	6	2	1	0	0	1	32
合計	18	65	18	9	46	14	28	13	8	3	5	10	237

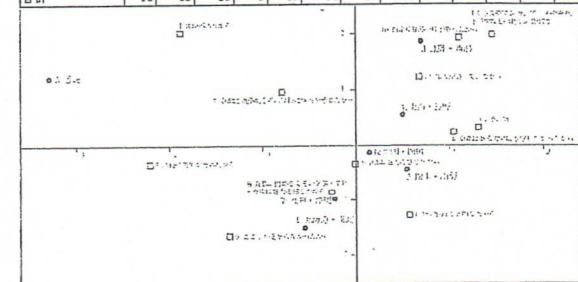


図10 地域別大学進学的主要原因(修学旅行で京都に来た人・女性) (n=237)

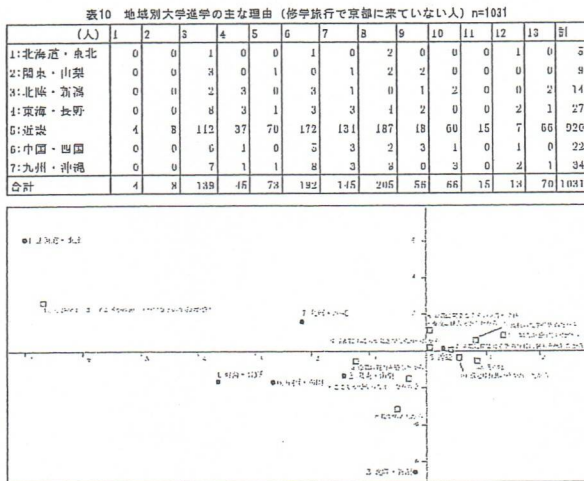


図11 地域別大学進学的主要原因（修学旅行で京都に来ていない人）（n=1031）

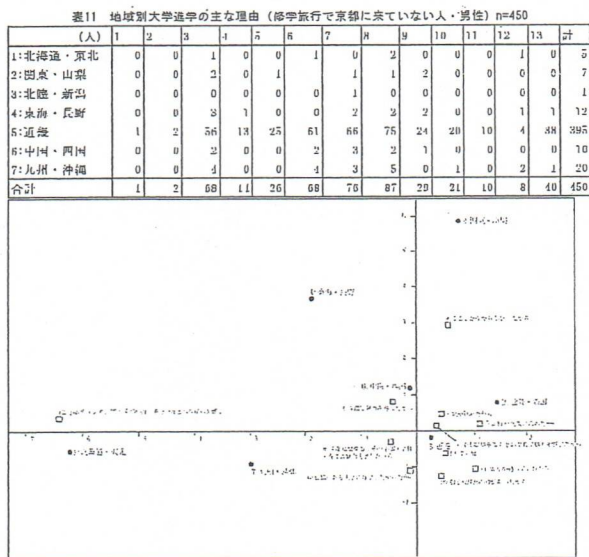


図12 地域別大学進学的主要原因（修学旅行で京都に来ていない人：男性）（n=450）

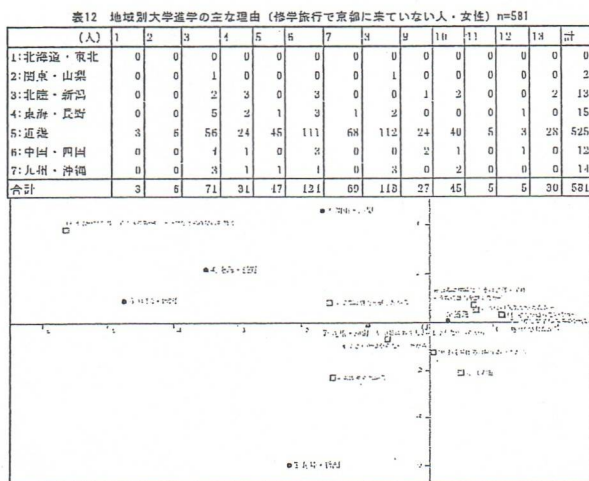


図13 地域別大学進学的主要原因（修学旅行で京都に来ていない人：女性）（n=581）

薦の枠があったから」「11 知人が通っていたから」「12 小説やマンガ、アニメや映画、ドラマなどの作品の影響で」、関東・山梨、中国・四国は「1 修学旅行で訪問したから」、北海道・東北、九州・沖縄は「3 京都に魅力を感じたから」「8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから」「9 ここしか受からなかったから」と関係した。男女とも、中国・四国は「3 京都に魅力を感じたから」、東海・長野は「6 京都にある大学に進学したかったから」と関係しており、これら地域は京都に関する関心が高いといえる。またそれらの地域は中学校の修学旅行で京都を訪問する地域であり中学校時代の体験が京都に対する関心を持つきっかけとなっていると考えられる。

修学旅行で京都市内を訪問していない人達について、地域別に検討したのが表10と図11である。「6 京都にある大学に進学したかったから」が図のほぼ中心にあり、全ての地域に共通する要因である。特に近畿は、この項目にくわえて「5 高校の先生が薦めたから」「7 京都に関係なくその学校に魅力を感じたから」「8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから」「11 知人が通っていたから」の項目とも近接している。近畿は、京都志向ないしは地元志向の強い人や大学・専攻自体の魅力で受験しているといえる。「3 京都に魅力を感じたから」と関係するのは関東・山梨、北陸・新潟、東海・長野、中国・四国である。特に関東・山梨は「3 京都に魅力を感じたから」と大きく関係し、修学旅行で京都市内を訪問していないけれども京都に魅力を感じて受験したことがわかる。

これら地域を男女別に検討したのが表 11 と図 12 (男性)、表 12 と図 13 (女性) である。男性の場合、近畿では「10 指定校推薦の枠があったから」「11 知人が通っていたから」などの要因で、北陸・新潟は「4 親が薦めたから」「5 高校の先生が薦めたから」「7 京都に関係なくその学校に魅力を感じたから」と京都とあまり関係のない項目との関係性が高い。反対に、「3 京都に魅力を感じたから」と関係性がある地域は東海・長野と中国・四国で、相反する要因（「6 京都にある大学に進学したかったから」「8 京都に関係なくその学部・学科・専攻に魅力を感じたから」）で二分されているのが九州・沖縄であった。

女性は「6 京都にある大学に進学したかったから」が共通項目としてあり、近畿では高校の先生の薦めや大学・学部の魅力の項目と関係性が高い。「3 京都に魅力を感じたから」と関係するのは関東・山梨、東海・長野、中国・四国であるが、修学旅行で京都市内を訪問したグループよりも関係性は低いといえる。ただし、男女とも近畿の値が占める割合が多い点に留意する必要がある。

3. 2. 修学旅行生に対するアンケート調査の結果

修学旅行で京都市内を訪問した中学生・高校生に対してアンケート調査を行った。近畿日本ツーリスト株式会社京都支店を通じて修学旅行生の宿泊先にアンケート調査票の配布を依頼した。また中学校、高等学校に協力を依頼してアンケートを配布・回収した。その結果、12 校（中学校 10 校、高等学校 2 校）、876 人（中学生 648 人、高校生 228 人）から回答が得られた。

京都に関する興味と京都市内の大学受験との関係を示したのが表 13 である。中学生・高校生ともに京都に対する関心は高い。しかし、京都市内の大学を受験し

表13 修学旅行生の京都に対する関心と受験の意志

(人)	1:とても興味がある	2:やや興味がある	3:あまり興味がない	4:まったく興味がない	合計
中学生	225	207	68	25	615
1:受験したい	22	10	1	0	33
2:受験したくない	72	119	36	19	246
3:わからない	131	168	31	6	336
高校生	60	98	44	17	219
1:受験したい	12	6	1	0	19
2:受験したくない	23	42	30	13	108
3:わからない	25	50	13	4	92

たいという回答は少なく、半分近くが「わからない」という回答であった。中学生・高校生とも「受験したい」と回答した人のほとんどが京都の歴史や文化、まちなみなどが好きだからという理由であった。「受験したくない」という理由では、中学生で具体的な回答は少なかったものの、自宅より遠いという回答が多く、高校生になるとほとんどが自宅との距離を具体的な理由にあげていた。「わからない」という回答の理由では、大学受験をまだ意識していないという回答が中学生の大半を占め、高校生では受験はするけれどもまだどの大学にするか決めていない人が大半であった。

自由行動時における経路から主な訪問先を図化したのが次ページの図 14 である。10 人以上が訪問した場所を図化した。清水寺や銀閣寺、金閣寺、龍安寺、二条城、伏見稲荷など世界遺産や有名寺社などが訪問先の上位としてあげられる。これは、京都市観光調査年報の訪問先ともおおむね近い結果である。注目したいのが、著名な場所の周辺や経路上にある場所にも一定の人数が訪問している点である。すなわち、著名な場所のみをピンポイントに訪問しているのではなく、その徒歩圏内や経路上も訪問していると考えられる。ま

たマンガミュージアムや白峰神宮、大江能楽堂など、現在の中学生・高校生が関心を持つ場所や修学旅行向けの対応をとっている場所も訪問されていることが明らかとなった。

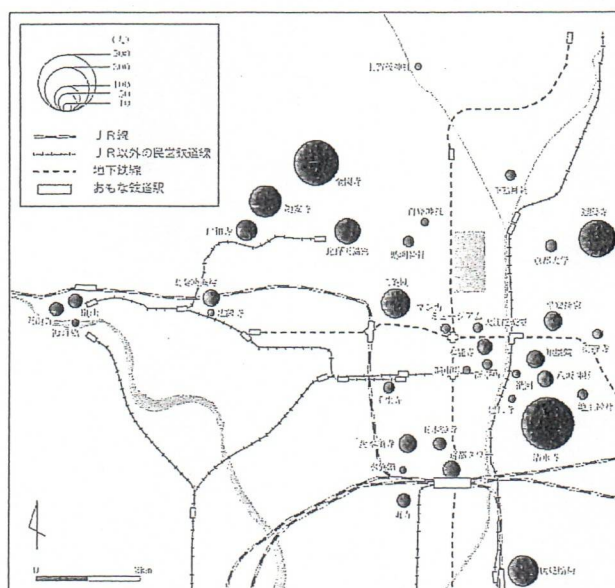


図 14 修学旅行生の主な訪問先（10人以上）

表14 修学旅行で良かった点・悪かった点

良かった点 (人)			
お寺・神社	128	学べる	26
見る	95	雰囲気	25
きれいな	94	古都・伝統	25
歴史	70	感じる	25
食事	67	タクシー	22
美味しい	57	行ける	21
街並み・景観	57	美しい	21
多い	52	文化	20
建物	50	悪かった点 (人)	
良い	43	バス	68
優しい	38	多い	59
親切	35	分かる	26
バス	31	時間	21
楽しい	29	高い	20

修学旅行中に訪問した大学については京都大学が23人（うち高校生は6人）、立命館大学は8人（うち高校生は1人）と少ないが、その理由が博物館の見学やキャンパス内での休息に利用されており、上記の訪問先の周辺や経路上にある大学が訪問されたといえる。大学生アンケートでも修学旅行中に大学を訪問した人は13人、16か所（京都大学8人、同志社大学4人、立命館大学3人、その他の大学1人）と少なかった。内容は、自由に学内を回った（7人）、食堂で食事をした（6人）、敷地内で休息した（3人）、ガイド付きキャンパスツアー（3人）、授業の体験（1人）であった。

修学旅行でよかった点、悪かった点について、自由記述欄からキーワードを抽出した。20人以上の回答をまとめたのが表14である。寺社やまちなみなど京都の特色が良かった点としてあげられている。また、食事や伝統などの評価も高い。見る、食べることなどが修学旅行のよい印象にあるが、注目したいのは学ぶというキーワードがあげられている点である。近年の観光行動でも学ぶことの楽しさが注目されており、その点で修学旅行本来の目的が果たされていると同時に修学旅行の内容が現在の観光のトレンドにも近づいている点が明らかとなった。悪かった点は少なく、バスの時間や経路、拝観料に関するものである。バスについては事前の学習で時間をとるか、迷うこと自体を楽しむようにする発想の転換が必要であろう。

さらに、自由行動中の昼食で食べられているものを抽出（10人以上）したところ、うどん（64人）、そば（29人）、お好み焼き（27人）、マクドナルド（24人）、ラーメン（24人）、和食（14人）、丼（13人）であった。表14で、食事の評価が示されているが、それは夕食のことを指していると推察される。その一方で昼食はうどんやお好み焼きのように、関西地方の特色があるものが食べられているけれども、総じてどこでも食べられるようなもの

で、安価な食事が選択されていることがわかった。

修学旅行の訪問先に関する情報の入手先についてまとめたのが表 15（ガイドブック）と表 16（ウェブサイト）である。ガイドブックを利用した人は 310 人に対し、ホームページは 115 人に留まった。ガイドブックについては「るるぶ」がその多くを占めた。ホームページについては、寺社の公式ホームページや京都市、京都府の観光協会のサイトが利用されている。

表15 訪問先の情報の入手先(ガイドブック)

表16 訪問先の情報の入手先(ウェブサイト)

ガイドブック名	(人)	サイト名	(人)
るるぶ	183	各寺社公式ホームページ	32
おすすめコース京都+奈良―修学旅行自主研修	31	京都市観光協会（府も含む）	25
まっぶる	28	wikipedia	9
クラスで配布されたプリント・ガイドブック	22	Yahoo!	9
乗る歩く京都	8	洛ナビ	6
ことりっぶ	5	Googlemap	5
大和を歩く	4	食べログ	5
文学歴史、旅行ガイド、京都ユニプラン、関西の旅	4	Yahoo!知恵袋	3
関西の旅	2	Google	2
じゃらん	3	ジョルダン時刻表	2
その他ガイドブック	20	JR京都	1
合計	310	その他のサイト	16
		合計	115

3. 3. 引率教員に対するアンケート調査の結果

修学旅行の引率教員にも修学旅行の実施や大学の訪問に関わるアンケート調査を実施し、19 人から回答が得られた。修学旅行の訪問先や行程については記述のあった全員が前年度の行程や、前年度の担当教員、旅行会社からの提案を参考にしていた。大学が修学旅行生に対して受入プログラムを持っていることについてもほぼ全員が知っていた。しかし、「時間が限られているので新たに大学を訪問することは難しい」「生徒には大学よりも歴史的な場所を少しでも多くまわってほしい」などの記述が見られ、積極的に実施されない要因が明らかとなった。くわえて、初めて京都を訪問する生徒がほとんどであるため、授業で習った場所などが優先される傾向が高い。

そのような現状であるけれども、大学が修学旅行と関わることについては教員からの要望も高い。実施が望まれる内容は、宿泊先で夕食後の時間を使った京都の歴史や文化に関わる内容や、自由行動の際に大学生や教員とともに市内を移動することなどであった。時間が限られているため、生徒が大学を訪問するよりは、教員や学生が宿泊先や行程などに出張するプログラムが望まれているといえる。

3. 4. 修学旅行生に対する大学の受け入れプログラムの検討

一方で、修学旅行生を大学が受け入れるためのプログラムについて、アンケート調査とプログラムの試みを行った。平安女学院大学では冬期にイルミネーションを実施している。そこで、イルミネーションに訪れる人の特性を調査した。11月30日（7人）、12月14日（9人）、12月18日（12人）の合計28人から回答が得られた。回答者の居住地は大阪府

内が3人、京都市以外の京都府内は4人であり、それ以外は京都市内であった。イルミネーションを知ったきっかけは新聞、テレビ、雑誌、ウェブサイトが各2名、通行中に知った(5名)、近所なので知っている(5人)、知人友人から聞いた(4人)であった。中学生・高校生は3人いたが、修学旅行中の中学生・高校生はいなかった。

また、修学旅行生の受入プログラムの試みとして、2013年3月15日に新潟県糸魚川中学校の生徒158名、引率教員10名による糸魚川の観光についての発表会を行った(写真)。居住地の観光について発表を行い、観光を学ぶ学生から意見を出すという試みである。中学生5クラスがそれぞれ糸魚川の歴史や文化、観光名所、食事などについての発表を演劇やクイズなどの様々な発表形式で行った。



4. 結果と考察

上記の大学生アンケートから、修学旅行で京都市内を訪問した人の3人に1人が、中学生・高校生に限れば2人に1人が修学旅行で京都市内を訪問したことが大学受験と関係しているという結果が得られた。また、小学生の時よりも中学生・高校生で訪問した体験が受験に大きく影響していることが明らかとなった。これは、大学の規模別に見ても修学旅行で京都市内を訪問したことがある人の方が京都自体の魅力や京都にある大学に入学したいという理由と強く関係している点からも明らかである。中小規模の大学では、学部や学科の魅力で受験される傾向が高い。これらの大学では特色のある学部や学科が多数あることを示すものである。そのような大学が集積している点が京都の強みといえよう。この結果を地域別に検討すると京都自体の魅力や京都にある大学に入学したいという理由は北海道・東北を除く地域に関係した。特に、東海・長野、中国・四国でその傾向は高い。また、修学旅行の体験が大きく関わるのが関東・山梨であった。男女別に見ると、男性は京都自体の魅力よりも、学部や専攻の要因のほうが大きく、女性は京都自体の魅力が他の要因を上回った。総数は少ないものの、修学旅行で京都市内を訪問していない人でも京都自体の魅力や京都にある大学に入学したいという理由は多く、特に女性でその傾向が高かった。北海道や東北の生徒は京都から居住地が遠く離れることと、京都よりも短距離に東京周辺の大学が京都以上に立地しているため、東京周辺の大学を選択したと思われる。

この結果から関東・山梨、東海・長野、中国・四国など中学生の時に京都を訪問する傾

向が高い地域の女性が修学旅行で京都に来たことで京都市内の大学に関心を持ち、受験したいという意識が高まったといえる。また、修学旅行の訪問が大学入学の直接的な契機となっていなくても、それを後押しする要因になったと推察される。修学旅行の体験が京都の関心につながり、その結果、京都に住んでみたい、京都の大学に行ってみたいという動機付けに結びついている。京都自体の魅力が他地域に居住する人にとってのプルの要因ならば修学旅行はその後押しをするプッシュの要因となっている。京都に住んでみたいと考えている若年層にとって、京都市内に複数の大学が立地していることは受験の時の選択肢が多くなることを可能にしている。

近畿の学生は京都にある大学に進学したいという一方で、京都に関係なく大学を受験している。前者は、京都に住みたい・住み続けたい、自宅から通うことができる大学に入学したいという理由と考えられ、修学旅行の影響が小さいといえる。近畿出身の学生のほとんどは、修学旅行で京都以外の地域に行っている。中学生の時の修学旅行先は 548 人中、沖縄県 (146 人)、東京都 (119 人)、長野県 (102 人)、長崎県 (73 人) と続く。高校生の時の修学旅行先は 539 人中、北海道 (188 人)、日本国外 (163 人)、沖縄県 (86 人)、長野県 (47 人) と続く。近畿の学生も修学旅行の訪問先が大学受験に影響するならば、京都市以外に立地する大学を選択すると想定されるが、この訪問先で大学の選択肢が多いのは東京都のみである。すなわち、修学旅行の訪問先に関心を持っても大学の選択肢が少ないため、東京周辺を除けば他地域に転出する数は少ないといえる。ミクروسケールで検討すると、京都市以外の関西圏にも大学を多数立地しており、それら地域と京都市内の大学の差別化が求められよう。

複数の大学が市内に立地していることは京都市の強みであるが、修学旅行で大学を訪問している生徒は少ない。そこで修学旅行生と大学を関連づけるプログラムの検討が必要とされる。大学生アンケートで「修学旅行生に対して大学がどのようなプログラムを提供したら京都の大学に来たいと思ってもらえるか」という質問に対しては表 17 の結果となった。男女の差はなかったが、中学生に対しては、「2 キャンパスライフについて (学内ツアー等)」「6 京都の歴史や文化遺産について」が多く選択されたのに対して、高校生に対しては「1 大学の授業について (模擬授業・実験等)」「2 キャンパスライフについて (学内ツアー等)」「3 複数の大学での活動について (学生祭典、ボランティア団体での活動等)」「6 京都の歴史や文化遺産について」が多く選択された。これは、中学生・高校生の学習到達度と、大学受験を控えている年数によるものといえる。すなわち、中学生に対しては大学の雰囲気を知ってもらうことと、京都の歴史や文化遺産に関心を持ってほしいということ、高校生に対しては、

これらにくわえて自分が
どの専攻を受験するか考
えてもらう機会やキャン
パスライフ・大学生の生

表17 大学生が考える修学旅行生向けのプログラム

	中学生に対して		高校生に対して	
	男 (n=363)	女 (n=456)	男 (n=360)	女 (n=417)
1 大学の授業について (模擬授業・実験等)	6.3%	9.2%	24.7%	26.4%
2 キャンパスライフについて (学内ツアー等)	32.3%	24.8%	35.6%	36.5%
3 複数の大学での活動について (学生祭典、ボランティア団体での活動等)	9.6%	12.5%	10.6%	13.9%
4 京都の若者文化について (マンガ、音楽、コスプレ等)	8.5%	11.2%	5.0%	1.8%
5 京都での就職や職業について (企業訪問、仕事体験等)	3.6%	4.4%	5.8%	6.5%
6 京都の歴史や文化遺産について	29.8%	29.8%	12.2%	10.7%
7 京都の自然について	3.0%	4.2%	0.6%	1.6%
8 その他	6.6%	3.9%	5.6%	2.7%

活というさらに具体的なイメージを持ってもらうことを考えている。大学の教員・職員よりも中学生・高校生に近い年代にいる大学生の考えは、中学生・高校生時代の意識をふまえたものであり、有効な意見と考えられる。修学旅行生の訪問先は、主要な名所を中心に周辺を回遊しているパターンが見られた。修学旅行の本来の目的と合致しており、訪問後の満足度も高くなっている。大学生が考える修学旅行生向けのプログラム内容は、修学旅行生の京都に対する関心をさらに後押しするといえよう。

修学旅行生が自由行動中に食べるものは、おおよそ京都でなくても食べることができ、かつ安価なものが多い。修学旅行生が活用しているガイドブックに掲載されている京都らしさを味わうことができる店舗と修学旅行生の昼食の価格帯がミスマッチしていることにある。夕食で京都らしさを味わうことができるのなら、大学の食堂で低価格帯の昼食をとることができる。食事の内容はどこでも食べることができるものでも、大学の食堂という空間は修学旅行生にとって非日常を体験できる空間となりえよう。

ただし、大学の食堂やトイレの利用、休息の場所として修学旅行生が利用する大学は、修学旅行生の主な訪問地の周辺や移動経路上に立地する大学に限られよう。修学旅行で京都市内の大学を訪問した学生も修学旅行生も少ないが、訪問されているのはそのような立地条件にあった大学であった。いいかえれば、修学旅行生がたくさん訪問する場所から離れた場所に立地している大学は訪問される可能性は低いと考えられる。そのため、修学旅行生受入のプログラムを大学内で実施した場合は参加者が少ないことが予想される。また、中小規模の大学では修学旅行生が心理的に構内に入りにくいと考えられる。

平安女学院大学で実施しているイルミネーションのイベントは夜間であり、修学旅行生やそれ以外の中学生・高校生も参加しにくいことが明らかとなった。ただし、糸魚川中学校の修学旅行生が平安女学院大学で行った地域の魅力を大学生に知ってもらう、考えてもらうというプログラムは修学旅行生、大学生ともに満足度が高い。大学内でプログラムを実施する場合は、大学の模擬授業や行事の参加や見学という受動的なプログラムよりも修学旅行生自身が発信できる能動的なプログラムの方が満足度は高いと考えられる。

これらをふまえると、修学旅行生が大学を訪問するプログラムよりも大学教員や学生が修学旅行の現場に出張するプログラムの方が多くの大学に適している。引率教員のアンケートからも、大学教員や学生が修学旅行に参加してもらえるプログラムを歓迎している。修学旅行を担当している旅行会社（JTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行）の修学旅行担当者に聞き取りしたところ、修学旅行を請け負う会社の選択において、金額だけではなく企画も重視するいわゆる企画競争型入札が増加していることがわかった。保護者もそのプレゼンテーションに参加する学校もあり、これまでの修学旅行の内容をふまつつも新しい企画が常に求められている状況であるという。旅行会社も大学教員や学生が修学旅行生に関わることができるプログラムについて大きな関心を示している。修学旅行生の宿泊先や移動中に大学教員が京都の歴史や文化などについての話をし、学生が大学の授業やキャンパスライフを生の声として伝えるプログラムが考えられる。

以上より、これからの修学旅行生に対する大学の取り組みは「食べる」「体験する」「学ぶ」というキーワードでまとめられ、その実現が望まれる。

5. 京都市への実践的な提言

修学旅行で京都市内を訪問した体験は、京都市内の大学の受験の動機として大きな影響を与えていることが明らかとされた。また、京都に対する関心が高まり、大学を受験するにいたらなくとも、今後の観光客として大いに期待されよう。そこで、これまでの結果から出された課題を検討すると、京都市の関係部局には以下のことが期待される。

観光に関わる所ではこれまで通り修学旅行の誘致を進めることで、修学旅行生が京都に関心を持つきっかけを提供し続けることができよう。少子化にともない、中学生・高校生の減少が想定されるなか、他地域よりも歴史と文化を学ぶことができるという京都の強みを発信していくことが必要であろう。修学旅行生に京都の魅力を知ってもらうには「デジタルに過度に依存しない（アナログ情報の選択肢を残す）」ことや「旅行雑誌・ロコミは重要な情報源」という認識が必要である。

そこで、現在発行されている一般の旅行ガイドブックに大学の情報を掲載してもらえよう働きかけていくことが期待される。具体的には、学生、教員、職員以外でも利用できる大学の食堂の紹介や、可能ならば大学の立ち入りが自由な場所の明示、トイレの利用、大学の文化財や博物館などの情報である。修学旅行生にとって、大学という空間は大学生以外入ることができないという認識が多勢を占めていると考えられる。そこで、このような基本情報の掲載が必要といえる。

京都市を訪問する観光客において修学旅行生は相対的に少ない。そのため、現時点で多数を占める年齢層に京都観光を優先的にアピールすることは必要である。しかし、今後も入浴観光客を維持するためには若年層のリピーターを獲得することが重要である。観光のまちというキーワードは修学旅行を体験することで十分に伝わっている。さらに、「教育のまち」というキーワードが修学旅行生に認識されることで修学旅行と進路の関係性が強化されよう。特に、どの地域でも食べることができるものよりも、京都の大学で食べるという体験が修学旅行における大学の体験の入口になるだろう。

一方、修学旅行生が京都に関わる情報にアクセスしてもらうための政策が必要である。修学旅行生に向けたプログラムを旅行会社にアピールすることで、中高の教員にその情報は伝わろう。中高の教員アンケートで明らかになったとおり、大学が修学旅行生向けのプログラムを実施していることは知られているものの、大学は生徒に訪問してほしいという場所には入っていない。中高の教員や旅行会社に大学プログラムの魅力を伝える必要がある。そして、中高の教員が京都観光のリピーターとなることで、修学旅行生の訪問者数の維持または増加につながるのである。

大学生や教員による修学旅行中のプログラムは、学生や教員が訪問する形態の方が実現性は高い。しかし、中高の教員や旅行会社は求めるプログラム内容に合った大学教員や学

生をどのように調べたらよいか、見つかったとしても問い合わせの窓口はどこになるのかなどが大きなボトルネックとなっている。このような問題点を緩和する窓口となるのは大学コンソーシアム京都である。参加大学が一斉に修学旅行生向けのプログラムを提供することは困難である。大学コンソーシアム京都にはプログラムを希望する大学と修学旅行生との間をコーディネートする役割が期待される。そのため、大学政策に関わる部署は大学コンソーシアム京都をこれまでのように後押しすることが望まれる。大学コンソーシアム京都は、修学旅行生の主な訪問先や京都駅に隣接している。中学校や高等学校で参加型プログラムの希望があった場合には、修学旅行の動線上にない大学や小規模の大学がここで持ち回りの出張講義や、現役大学生と語り合う場が設けられよう。

また、このような調査を継続的に実施することで修学旅行と大学進学との関係性がより明らかにされる。そのための調査の機会の提供が京都市に望まれる。

6. 今後の研究課題

今回の調査で、修学旅行と大学進学の関係性についての基礎データがそろった。そこで、修学旅行生の受け入れの取り組みの調査を継続して行っていく必要がある。これで、経年変化を見ることができる。今回のデータはその基準となる指標となるだろう。また、修学旅行生向けのプログラムは、京都市内の全大学で一斉に始めるのは時間も労力も負担が大きい。そこで、平安女学院大学の教員と学生が修学旅行生を受け入れるプログラムや、修学旅行先に訪問するプログラムを旅行会社と協同で進めていく予定である。

謝辞

アンケートに協力していただいた大学生、中学生、高校生、引率教員の皆様をはじめ関係者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。アンケート調査におきましては大学コンソーシアム京都に加盟する各大学の先生方、学生の皆様に多大なるご協力を頂きました。

引用・参考文献等

- ・井上学・荒川雄次「人的災害が観光産業に及ぼす影響と課題ー京都市における新型インフルエンザの影響を事例としてー」(2010) 平安女学院大学研究年報 10、平安女学院大学、1-8 頁
- ・京都市産業観光局『京都観光総合調査』『京都市観光調査年報』各年版
- ・桐村喬・近藤昭夫「1960 年以降の京都市における学生の居住地の時空間的パターンの変化に関する一考察」(2010) 立命館地理学 22 号、立命館地理学会、89-107 頁
- ・小長谷一之『都市経済再生のまちづくり』(2005) 古今書院、248 頁
- ・宗田好史『創造都市のための観光振興』(2009) 学芸出版社、207 頁

¹⁾ 対象とした大学・短期大学は大学コンソーシアム京都に加盟している大学とした。そのため、学部・学科などが京都市外にある大学生からの回答も含まれる。また、大学院生からの回答も含まれる。これらを含めて分析、検討した。なお、本文中では回答者についてはすべて学生と記載した。また回答された内容のなかには、無回答や複数選択が可能な設問があるため、各項目の回答者数は一致しない。

²⁾ 大学コンソーシアム京都のホームページ上にアンケートのリンクを張ったうえで、本研究に関わる教員、本研究以外の今回の調査事業に関わる大学の教員や大学コンソーシアム京都の職員、学生などを通じて、アンケート実施に関する告知と協力を依頼した。そのため、回答した学生が在籍する大学・短期大学に若干の偏りは見られる。

³⁾ 理工系の学生が若干少ないが、これはそれら専攻のキャンパスが京都市外にある大学が多いため、学生がアンケートの回答を躊躇したためと考えられる。

⁴⁾ 大学の規模は、文部科学省「学校基本調査」に従って分類した（2,000人未満：小規模、2,001～5,000人：中規模、5,001人以上：大規模）。アンケートに該当する大学は以下のように分類される。大規模（8校）：京都大学、京都産業大学、京都女子大学・短期大学、同志社大学、同志社女子大学、佛教大学、立命館大学、龍谷大学。中規模（10校）：京都工芸繊維大学、大谷大学・短期大学、京都外国語大学・短期大学、京都学園大学、京都精華大学、京都造形大学、京都橘大学、京都文教大学・短期大学、京都薬科大学、花園大学。小規模（19校）：それ以外の大学・短期大学

⁵⁾ 以下、図13までの図はそれぞれのクロス集計をもとにコレスポンデンス分析によって図化されたものである。